

情報社会で生きるということ : 「生きること」と「死すること」の情報学

著者	仲田 誠
雑誌名	筑波大学地域研究
巻	41
ページ	51-70
発行年	2020-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00159912

情報社会で生きるということ — 「生きること」と「死すること」の情報学—

Life and Death in the Information Society: Ontological and Ethical Approach to the Meanings of Life in the Information Era

仲田 誠
NAKADA Makoto

Abstract

In this paper, the author wants to do two things in order to make people aware of the potential depth of life in the information era, in particular in Japan. Firstly, the author will explain people's ways of thinking and feeling about the meanings of life in the informatized environment, showing the research data performed in Japan in 2016. These data will provide us with 'evidence' to show the fact that the ways of people's thinking and feeling about the meanings of life are thought to reflect people's fundamental beliefs in values. These values include such views: "Within our modern lifestyles, people have become too distant from nature" (Distance from nature); "People will become corrupt if they become too rich" (Honest poverty); "People have a certain destiny, no matter what form it takes" (Destiny) as well as the views about empathy with victims of disasters, craftsmanship, traditional sense of beauty and empathy with requiem service for broken things and so on. Secondly, the author will evaluate these values and views through examination of related references including Husserl, Heidegger and others. Through these processes, the author will find alternative ways to overcome the narrowed views in the information society which are usually under influence of 'reductionism', values coming from neo-liberalism and the undoubted belief in 'separation of experience and truth.' In doing so, the author will expect that the 'existential meanings of care by robots or of self-driving cars' can be explained from the perspectives which are related with people's awareness of life combined with death, illness and vulnerabilities.

Key Words : deep meanings of life, information society, life and death, robotethics, phenomenological approach to information society

キーワード : 生きることの意味の深さ、情報社会、生と死、ロボット倫理、情報社会に対する現象学的アプローチ

1. 情報社会で生きる意味について

本稿では、情報化の問題を人生の意味の深さ、多様性という視点から論じたい。情報化の問題を哲学的に、倫理的に扱ってきた研究は過去にももちろん数多くある。しかし、その議論は、人間の意味について考える場合でも、知性とか思考とか、人間の主体性とかごく限られた視点に注目する場合が多い。人生には、身体の問題や、生死の問題、老いや病の問題などが付きまとうがそういった視点は欠落していることが多い。しかし、考えてみれば、ロボットや人工知能と人間との決定的違いは、生死に関する問いが前者には欠けているということである。

本稿ではそのような問題意識から、情報化と人生の問題を量的質的分析両方の手法で再度深く考えてみたいと思うのである。

「光と影」という言い古された表現を使えば、近年、情報社会の光と影に関する議論は再度盛んである。

ロボットに介護されること、自動運転車の導入、クラウド化による会社の変化と働き方の変化、モノのインターネット（化）(IoT)による家庭生活の情報化、こういった情報化全般を通じて生活を豊かにするという論調が一方では盛んである。あるいは、情報化を進めないと日本は立ち行かなくなるという議論も聞こえる。しかし、他方で、情報化社会が進む方向に不安を感じる声もある。最近のリクルート関連企業の就活情報の目的以外の利用の問題などに象徴される事例はその端的な例である。情報化による利便さや情報の共有化という状況が、容易に情報操作の問題に転じるという不安がそこにはある。情報化社会の問題は山積みであり、政府内での公文書書き換え問題が話題になったが、公文書をデジタル化し安易にコピーできることが問題を広げるのだという論調などもある。一方、マイナンバーなどを保険証がわりに使用する動きに見るように、「過度に」情報化を進めようとする流れなども政府内には強くある。ここに矛盾を見つけるのは簡単であるが、光と影は政府のありかたも方向づけているのである。

情報化の光と影という言い方は、言い古された表現だが、しかし、実のところ、情報化が人生や社会をどう変えるかという議論はずっと情報化社会論の初期からあるいは1950年代の「産業社会論」の時代から継続中なのである。ただ、過去も現在もその議論の中身は薄い。知性とか、思考とか、計算とか、限られた側面のみ注目して情報化の問題を論じるケースがほとんどなのである。人生や人間存在の多様性という視点から考える議論は多くはない。

現在の深層学習ブームをめぐる動きも、その根は1970年代、80年代からあるものだが、潜在的には、そこには「人間とは何か」という問いがある。近年の深層学習モデルの人工知能は、技術論的には、1970、80年代の機械学習、人工ニューロンの研究の挫折を乗り越えるかたちで進められてきたものだが、「人間とは何か」という問いはその根底に潜められた形のまま封印されている。コネクショニズムや力学系のモデル、古典的計算主義、古典的表象主義等といった言葉とセットになった議論の経過はほとんど忘れられたままである。

思想とか、人間論とかそういったものは情報化の問題を考える上で必要ない。生活に即した情報機器の意味とかを考えれば良いのだという意見もあるかもしれない。

しかし、そのような姿勢自体が一つの人生論だとも言えよう。

日本でもいつの間にか、自動運転車に関する法的整備の問題がどこかで進展し、「すぐに対処できる状態であれば、自動運転車に搭乗している運転者は運転中にスマホなどを見ていても良いなど」という答申が出てきたりして驚かされるが、そこに人間の定義を忘れた上での人間論の影響という問題を見るのは難しいことではない。スマホの操作をしている状態から即座に車の運転に切り替えることができるようになるのは、「キネステーズ」(フッサールの用語)的に考えても無理である。自動運転車の場合には、そこにさらにいわゆる「トロッコ問題」が関わったりする。

以上のような問題意識のもと、人生の意味とは何かという論点と情報化の問題を結びつけて考えようというのが本稿の趣旨である。

以下、このような問題意識のもと、考察を二つの手順で進める。一つは、情報化の問題も含め、生きるとは何か、考えるとは何か、ケアするとは何か、生活の中で機械化を進めるとは何か、そういった問題について、さまざまな文献を紐解きながら、また筆者自身の考察や経験の内容も交えて論考を進めたい。二つ目には、筆者自身の調査データ等各種データを紹介しながら、当該の問題を考えてみたい。(順番は二つ目が先になる。)人生の深さ、広さから情報化の問題を考える必要があるのは、じつは、日本以外でも当然あることで、「生きる意味の深さ」について他の国や社会の事情も考慮におき、「人間であることについての意味そのもの」も考えながらこの問題について考察を深めていきたい。

II. データに示された「生きる意味の深さ」

ここでは、筆者自身がおこなった調査の結果を紹介し、情報社会で生きること、あるいは日本に生きる人にとってそもそも生きることとはどういうことなのか、データをもとに考えてみたいと思うが、ここでの結論を言えば、生きること、生活することの意味は、生きがいの中味や悩み、心配事等を含め、多様である、ということになる。まず、このことを押さえないと日本における情報化の問題は本質的なかたちでは進展しないだろうという結論になる。

1. 調査データにみる生活の意味・生きることの意味

以下、筆者が2016年に、福島、宮城、岩手の被災地3県に住む年齢25歳から44歳までの男女600人を対象に実施した調査の結果を紹介するが、全体として見れば、情報化に関する関心は高くないのである。これは驚くべき事実ではあるが、このことは、日本で情報化が進んでいない、情報機器が使われていないということではなく、情報機器やそれを利用したサービスは使用しているが、情報化に関する関心は高くないということである。ここには、明らかに矛盾があるが、それが日本における情報化の実態である。このような数値は2016年の調査だけに見られる傾向ではなく、過去の調査でも繰り返し確認された点である。

次の表1は日本社会で何が重要な問題かという角度から情報化の問題を含むさまざまな問題に関する関心を訊いたものだが、数値が示すように、情報化に関する関心は高くない。「IT(情報

通信技術)の普及促進」への関心は、9.8%にしかすぎない。「介護の現場などでのロボットの採用による福祉の内容の充実」というもう少し具体的なかたちの問いに対しても、回答者の割合は16.7%と低い数字になっている。

表1 情報化に関する関心 (2016年調査: N=600)

政府首脳の一新など政治改革	80 (N)	13.3 (%)
防衛・安全保障問題	153	25.5
消費税の導入など経済の再建	122	20.3
エネルギー政策の見直し	152	25.3
原発政策の見直し	159	26.5
地球環境問題	143	23.8
IT (情報通信技術) の普及促進	59	9.8
被災者の救済	135	22.5
犯罪の増加	149	24.8
少子化・高齢化社会の到来	257	42.8
社会的モラルや倫理の再構築	151	25.2
社会福祉の充実	201	33.5
個人情報・プライバシーの保護	110	18.3
防波堤の整備などハード面での災害対策	85	14.2
災害時に有効な情報通信技術の整備	120	20
介護の現場などでのロボットの採用による福祉の内容の充実	100	16.7

(この調査での調査対象者は、岩手、宮城、福島3県の人口に関する男女比、年齢別人口割合に基づく統計資料をもとに選択したもので、割り当て法という手法によるものである。調査はインターネット利用者に関して行われたもので、実査は調査会社に依頼した。調査費用は、科研費によるものである。)(「現在わが国が取り組むべき問題として何が重要か」という問いに対する答え (MA))

次に別のかたちで、自分の人生にとって情報化の大切さはどうかと訊いても、関心全体の中に位置づけるかたちで訊いた場合でも、表2のデータに見るように関心は低いのである。「スマホ・PC・SNS (フェースブック・ツイッターなど) などで友人・知人とこまめに連絡をとること」が自分の生き方にとって大事だと答えた人はわずか10.0%しかいないのである。

表2 生きることに全体の関心の中での情報化に関する関心の低さ (2016年調査: N=600)

スマホ・PC・SNS (フェースブック・ツイッターなど) などで友人・知人とこまめに連絡をとること	60 (N)	10.0 (%)
経済面での安定、豊かさ	258	43
災害や犯罪のない安心して住める生活	201	33.5
家族や親しい友人たちとの心の交流	196	32.7
社会的モラルや常識を大切にし、人間性をみがぐこと	174	29
自分に納得の行くような仕事や勉強の成果を得ること	144	24
趣味や余暇活動を通じての自分らしさの追及	209	34.8
政治や社会の問題に関心をもつこと	110	18.3
環境にやさしい生活をする	104	17.3
心のよりどころになるものを得ること	204	34
ボランティア活動などによって人の助けとなること	58	9.7
スマホ・PC・SNS (フェースブック・ツイッターなど) などで世の中の動きを知ること	85	14.2
自分が生まれてきた意味を考えて理想的な生き方を追及すること	94	15.7

(「自分の人生の中で大切にしたいと思っているものは何か」という問いへの回答 (MA))

さらにこれを詳しく分析し、「スマホ・PC・SNS (フェースブック・ツイッターなど) などで友人・知人とこまめに連絡をとること」が人生の生き方で大切だと思っているを選択した人のうち、同時に「心のよりどころになるものを得ること」を選んだ人がどのくらいいるかを調べてみると、この割合は、46.7%となっており、高いとも低いとも言えない。しかし、回答者全体のうちで、「生き方」として「スマホ」と「心のよりどころ」を両方とも選んだ人は4.7%にしか過ぎず、全体として見れば、「スマホやSNSによるコミュニケーション」は「生き方の選択肢のうちわずかな割合を占めるものになっている」という結論が引き出される。

表1の質問を「少子高齢化・社会福祉に関する問題全体の中での情報化への関心 (ロボットによるケア・介護の問題なども含めた)」というより具体的な文脈で訊いた場合も、情報化への関心の低さは同様である。「わが国が直面する少子高齢化、社会福祉の充実を考えた場合、どのような対策が望ましいか」訊いた場合、一番多い答えは「年金制度」の充実 (41.5%) など、制度の整備・充実の必要性についての回答である。それに加えて社会全体のありかたの問題の改善をあげる人が多い。「教育・科学技術の向上を促進し、国全体の活性化をはかり、子供、若者、高齢者が希望をもてる社会をつくる」 (27.0%) 人も多い。それに比べて、「介護の現場などでのロボットの採用による福祉の内容の充実」 (19.8%) 「ロボットを使ったセキュリティ・サービス、留守番システムなどの充実で子供や高齢者の安全を促進」 (13.5%) は少数である。

一方、情報化に関する関心の低さは、情報化が生活レベルあるいは生きることに関わるレベルで進んでいないということを示すわけでもない。また、生き方そのものについても、生きる場 (地域社会など) との関わりやロボットや人工知能を積んだ人工物 (自動運転車など) がどう生

き方と関わってくるかなどについても各自がそれぞれ自分なりの考えをもっているようである。そのような生き方の変容の可能性にも関心がある人が多いと言える。大事な点は、そこでの意見は多様だが、その多様性は人生観の広さ、深さともつながっているということである。データを分析することでそのことがわかるのである。たぶん、このような人生の問題については、情報化と人生のありかたの関連性も含めて日頃お互いに話すケースは少ないのかもしれない。その意味では人生の意味の広さ・深さに関心をもつ人は一見少数派であるように見える。しかし、実態は、筆者のデータで見るかぎり、そうではないのである。潜在的にせよ、人々の生き方への関心は広くて深い。それが相互に、問題どうしてどう繋がっているのかが見えないことが問題なのだろう。あるいはそれを見通せる場のようなものが失われているのであろう。

次に表3は、「地域での生き方」に関わる様々な項目に関する関心度を尋ねた結果をまとめたものである。この数字だけ見ると、人々は地域社会に関わる問題に対して多様な意見をもっていて、特に地域社会に強い関心を持っているとか、あるいは関心が低いとかはこのままでは言えない。ただ、この表だけではわからないが、この表に示されている「地域社会での生き方」の問題への関心度を他の問題への関心度（ロボットへの関心、働くことへの関心、政治関心度、地球環境問題への関心度）などと関連させると、重要な点が見えてくる。驚くべきことに「地域社会での生き方」の問題への関心のありかたは、他の社会問題への関心のありかたと強く連動しているのである。つまり、「地域の問題」はそれだけで孤立して存在しているのではなく、他の問題を含めた「全体的関心」とでもいうべき意味のネットワークの中に置かれているのである（これは後で詳しくデータを見ながら検討する）。それだけでなく、こうした関心のネットワークは、さらに「生きる意味の深さ」に関わる問題とでもいうべき他の問題への関心や共感とも連動している。「生きる意味の深さ」とは、災害時の犠牲者への関心・共感、事故の犠牲者への共感・関心、孤独死の問題への関心・共感といった「他者の死」の問題への関心や共感を含み、また、これとはある意味では逆の「生きる意味への関心」、つまり、ものづくりの職人のまごころといったものへの共感、母のあかぎれの手を見た時の感謝、衛星探査機はやぶサの帰還のものがたりへの共感、苦労をわかちあった職場の同僚へのつながりの意識、こういったものとも強く連動しているのである。

ここから見えてくるのは、「地域社会での生き方」に関して人々が個々の問題にとどまらず、個々の問題の向こうにある何かある本来的な生き方のようなものを（少なくとも潜在的には）志向しているということである（「志向」の意味に関しては後で詳しく論じる）。

あるいは地域社会とは個別的な問題への関心を通じて「全体としての生きる意味」が問われる場であるということでもある。

その意味でデータを見ると、何かそこに特別なものが見えてくるようにも思える。人々は、「地域のつながりに関心を寄せ」、「そのつながりを大切なものと評価」し、「一人暮らしの高齢者のことを気かけ」、「被災時の問題を自分自身のことと受け止め」、「地域の生活と自分の人生の記憶を重ね合わせ」、「孤独死に心を傷めている」。（まるで宮沢賢治の詩を読むようだ。）

さらに重要なこととしてこの「生きる意味の深さ」のネットワークとでもいうべきものには、

「ロボットによる介護」の問題に対する関心のありかたをはじめ、生活の中での人（自分たち）とロボットとの出会いの問題への関心も含まれている。ロボットも生きる意味の場に登場してくるということになるのである。

表3 自分の住んでいる地域への関心（2016調査）（N=600）

自分の住んでいる地域社会はつながりが強いところだと思う。	29.0(%)
地域社会のつながりは生きていくうえで大切で重要だと思う。	49.5
もし地域で災害が発生した時、近くに老人などがいたら、（自分はそういう人たちの）避難の手助けをしたいと思う。	51.5
自分の住んでいる地域で災害が発生したら、一人暮らしの老人などは避難に困るだろうと（自分は）日頃心配している。	44
自分の住んでいる地域が災害に襲われた時、自分も被害を受けるかもしれないと思う。	62.3
自分の住んでいる地域には自分の大事な思い出につながる場所がたくさんある。	39.3
地域内でのことに限らず、新聞などで孤独死のはなしを聞くと身近な問題だと感じる。	47.8
地域内でのことに限らず、新聞などで老人による万引き犯罪の増加のはなしを聞くといやな気持ちになる。	56.4

（上記数字は「そう思う・そう感じる」、「どちらかといえばそう思う・そう感じる」の合計値）

ロボットや人工知能との関わりは現実にはほとんどないはずなのに、この点についても人々は各自の考えをしめす。たぶん、ふだんの生活が生きる意味の地平のようなものとなっていて、その中には生き方への志向性のようなものがあり、人々は日常の生活の中にあるいはその奥に何か大切なものがあると感じているようだ。その地平に立って見ると、なじみのないロボットの問題や人工知能の問題についてもさまざまな意味が見えてくるのかもしれない。

データから読みとれるのは次のようなことだ。「ロボットが人間の生活に深く入り込むようになってきた近年、欧米では、ロボットに関する倫理的な問題がいろいろなところで真剣に議論されるようになってきています。次のような意見や考えにあなたはどの程度共感できますか。それぞれについてあてはまるものを一つずつお選びください。」という質問に対し、人々（回答者）は、「ロボット介護」にはやや懐疑的だが、「ロボットによる教育（効率効果という点から見て）」はやや肯定的で、「（人命の損失を防ぐという名目での）ロボット兵器の使用」には賛否が二分し、「（針供養ならぬ）ロボット供養」にはそれなりの割合の人が共感を示し、「自動運転車」には、「人命をまかせられるのか」という点や「だれが事故時に責任をとるのか、ロボットなのか」という点ではかなり懐疑的で、一方、「人間のミス等を防ぎ安全性が増すならそれでよい」と考える人もそれなりに多いということである。データを見るかぎり、人々はロボットや人工知能との生活をする上での出会いにも、自分なりの考えをもっているということが言えよう。

表4 生活の中にロボットが入り込む問題への関心 (2016調査)

ロボットに介護をまかせることは便利ようだが、同時に介護される人の社会的孤立を強めるので問題がある。	30.0(%)
学習効果をあげるために、ロボットを学校で子供の教育用に使うのは、良いことだ。	33.5
人間の死傷者が少なくすむように、ロボットを戦場で使うのは良いことだ。	26.7
針供養という儀式があるように、使われなくなったロボットやコンピュータはもっと供養されてもいい。	31
人工知能による自動車自動運転ロボットは便利ようだが、機械に生き死に関する判断をまかせることを考えると、安易な利用には問題がある。	42.1
人工知能による自動車自動運転ロボットは便利ようだが、機械に運転に伴う責任の問題を任せることはできないので、安易な利用には問題がある。	43.7
人工知能による自動車自動運転ロボットは人間のミス等を防ぐので、完全自動運転でなくても、安全性が増すならそれでよい。	40.9

(上記数字は「そう思う・そう感じる」、「どちらかといえばそう思う・そう感じる」の合計値)

2. 調査データにみる生活の意味・生きることは思想である

表3は地域での生き方に関わる事項・問題への関心・意識の内実を示すものだが、これに地域での生き方に関わる項目をさらにいくつか加えて(調査の時に訊ねた項目)因子分析(主因子法、バリマックス回転)をするとなんとただ一つの因子にまとまる。これは驚くべき結果だが、地域生活はその中に様々な側面をもって今回の調査の数字を通じて見るかぎりほぼ一つのコアになる意味を共有しているということになる。いわば「地域社会で生きることは一つの思想である」とも言えるのだが、この因子を「地域とのつながりの深さ」因子と名付け(因子負荷量の平方和は49.157、因子を構成する9項目の α 係数は.892で尺度として成り立つ数字になっている)、この因子を利用して、情報社会に生きることをの実像を詳しく解析してみることにする。

表5は、「地域とのつながりの深さ」因子とわれわれが日常生活で体験する「人生の意味の問いに関する項目」とでも呼べる項目との関連性をまとめたものである。「人生の意味の問いに関する項目」とは、「ものあわれ」とでも呼ぶべき美的倫理意識((1)の項目=夏の花火やホタルなどははかないから美しいのだと思ったりすることがある)(これは美的意識だが、同時に「だから人生はそのつどそのつどの生き方を大事にしなければいけない」等という意味にもつながり、その意味で、美的倫理意識と呼べるものである)、「犠牲の意味」に関する項目((2)、(5)、(6)、(7))、「孤独死」に関する項目((3))、「映画やドラマの登場人物の生き方の意味」に関する項目((4))、「子供時代の学校生活への思い」((8))、「アニメのヒーローの自己犠牲かつ献身的エピソードへの共感」項目((9))の各項目のことを指す。

表5の数字はこのような「地域とのつながりの深さ」因子と「人生の意味の問いに関する項目」との関連性(相関係数)を示すものだが、数字が示すとおり、ここでは驚くべき知見が得られている。筆者のこれまでの経験上、600人というサンプル規模の社会意識調査では、なかなか相関係数0.5とかを超える相関を得ることはできないが(尺度などがもともと標準化された心理学では別である)、ここにはそういった数字がずらっとならんでいる。

さらに、とりあえず「人生の意味の問いに関する項目」と命名した項目間の間でも次の表6に見るように、項目間の間に強い関連性が見られる。

この点に加えて、「地域のつながりの深さ」の因子は「政治関心度」、「地球環境問題への関心度」、「様々なロボット観」との間で強い関連性を示す(表7、8)。さらに、「孤独死」など「生死の問題」は、「より良く生きること(職場や家庭などで)」への関心とつながる(表8)。

このように見てくると、「地域のつながりの深さ」の因子や「人生の意味の問いに関する項目」を含めて、いわば全体で「生きる意味」に関する項目群とでもいうべきものがそこに立ち現れてきていることがわかるのである(この地平には、政治関心や環境問題への関心も含まれる)。

「人生で出会う生と死の問題」が「人生の意味深さ」につながり、それがさらに予想せぬような意味や価値に関する意識の連関とつながるとい実態がここにはある。

表5 「地域とのつながりの深さ」因子と様々な項目の相関(2016調査)

(1) 夏の花火やホタルなどははかないから美しいのだと思ったりすることがある。	(2) 災害などで自分を犠牲にして他人を助けた人の話を聞くと自分も人生を大切にしたいと思ったりする。	(3) 新聞等でたとえ「孤独死」と言われようと、それぞれの人生にはかけがえのない意味があったはずだと思ったりする。	(4) 映画やドラマの登場人物の悲劇に感動した時、悲しいけれど一方で大事なものを教えられたような気持ちになる。	(5) 交通事故や事件の現場などに花束が供えてあるのを目にすると、被害者や被害者の家族の姿がはっきりと脳裏に浮かぶ。	(6) 交通事故や事件の現場などに花束が供えてあるのを目にすると、人の世のはかなさをあらためて思い、人生について考えたいと思う。	(7) 交通事故や事件の現場などに花束が供えてあるのを目にすると、犠牲になった人のこれまでの人生の中でこの特別の日がどんな一日だったのかと思う。	(8) 普過ごした学校の前などを通ると、「あの頃」がなつかしくなり、一緒に過ごした人たちのことを考える。	(9) 鉄腕アトム最後のエピソードが地球を救うためのアトムの自己犠牲だったと知ると感動する。
.513**	.633**	.528**	.563**	.474**	.529**	.491**	.522**	.470**

(数値は相関係数。 **は有意度1%未満、 *は有意度5%未満(両側))

表6 「人生の意味の問いに関する項目」間の相関(2016調査)

	(1) 夏の花火やホタルなどははかないから美しいのだと思ったりすることがある。	(2) 災害などで自分を犠牲にして他人を助けた人の話を聞くと自分も人生を大切にしたいと思ったりする。	(3) 新聞等でたとえ「孤独死」と言われようと、それぞれの人生にはかけがえのない意味があったはずだと思ったりする。	(4) 映画やドラマの登場人物の悲劇に感動した時、悲しいけれど一方で大事なものを教えられたような気持ちになる。	(5) 交通事故や事件の現場などに花束が供えてあるのを目にすると、被害者や被害者の家族の姿がはっきりと脳裏に浮かぶ。
夏の花火やホタル	1	.483**	.458**	.486**	.487**
災害時などの犠牲	.483**	1	.512**	.562**	.491**
「孤独死」	.458**	.512**	1	.503**	.497**
登場人物の悲劇	.486**	.562**	.503**	1	.529**
被害者や被害者の家族の姿	.487**	.491**	.497**	.529**	1

(数値は相関係数。 **は有意度1%未満、 *は有意度5%未満(両側))

表7 「地域とのつながりの深さ」とロボット観・政治関心との相関（2016調査）

(日本の) 国内の政治問題	地球環境問題	ロボットに介護をまかせることは便利なようだが、同時に介護される人の社会的孤立を強めるので問題がある。	学習効果をあげるために、ロボットを学校で子供の教育用に使うのは、良いことだ。	針供養という儀式があるように、使われなくなったロボットやコンピュータはもっと供養されてもいい。	人工知能による自動車自動運転ロボットは便利なようだが、機械に生き死にに関する判断をまかせると、安易な利用には問題がある。	人工知能による自動車自動運転ロボットは便利なようだが、機械に運転に伴う責任の問題を任せることはできないので、安易な利用には問題がある。	人工知能による自動車自動運転ロボットは人間のミス等を防ぐので、完全自動運転でなくても、安全性が増すならそれでよい。
.458**	.481**	.356**	.282**	.318**	.373**	.371**	.312**

(数値は相関係数。 **は有意度1%未満、 *は有意度5%未満 (両側))

表8 「人生で出会う生と死の問題」と「人生の意味深さ」の連関（2016調査）

	国内の政治問題	地球環境問題	地域の町づくり・村おこし	職人のまごころ	ハヤブサに感動	母親のあかぎれの手	職場の仲間への共感	子供の苦勞への思い	子供時代の記憶
地域とのつながりの深さ	.458**	.481**	.518**	.418**	.403**	.466**	.343**	.433**	.439**
災害犠牲者共感	.409**	.448**	.370**	.442**	.439**	.512**	.349**	.456**	.505**
孤独死への関心	.363**	.346**	.319**	.370**	.301**	.417**	.263**	.355**	.404**

(職人のまごころ=時計、玩具、食器など丁寧に作られた製品を手にとると、それを作った人のまごころのようなものを感じられる、日本人は一般にそのような感覚をもつ国民なのではないかと思う。；ハヤブサに感動=日本の衛星ハヤブサが何年もの苦闘の末、地球に帰還した話を聞くと、ハヤブサは人ではないと知りながら、苦勞をねぎらいたくなる。；母親のあかぎれの手=冬になってあかぎれになった母親の手を見ると、口には出さないが感謝したくなる、日本の親子関係とはそういうものだろうと思う。；職場の仲間への共感=職場の仕事が大変でも、いっしょに苦勞している仲間のことを考えると、職場を簡単に去るなどということはできない、日本人とは一般的にそういったものだと思う。；子供の苦勞への思い=自分の子供(あるいは自分にも子供がいたらその子供)には生きる上で苦勞させたくないが、同時に苦勞して強い人間になってもらいたいと思う。；子供時代の記憶=子供の時に遊んだ学校の砂場や鉄棒などを見ると、子供時代の純粋な心が人生には大事だとあらためて思ったりする。) (数値は相関係数。 **は有意度1%未満、 *は有意度5%未満 (両側))

III. 生きる意味の深さの問題について存在論的に考える

1. 還元論や競争原理では社会は頹落する

以下では、前節の分析を経て見えてきた人々の意識の中にある「生きる意味の深さ(への共感)」の背景にあるものを文献の参照等も含めて考えたい。(「生きる意味の深さ」は「死ぬことへの意味の深さ」とも関連するものであったということは再度確認しておきたい。)

ここでは情報社会に生きることを意味のありかたを中心に考えてきたわけだが、情報社会で生きることを意味のありかたは単なるメディア利用とかSNSでのコミュニケーションへの参加とかそういったメディア的な問題の範囲をはるかに超えて広がっていることはすでに明らかである。「生きる意味」は情報社会に関する諸問題だけを考える視点ではとらえきれないということだが、これは今新たに広がりつつある情報化への過度の期待等の問題、あるいはいわゆる「文系不要論」に象徴される自然科学・技術の過度の重視という現状を考えると見落とすことができない点である。

すでに「生き方の深さ」について理解していない各種の論がわれわれの社会に滲透していてその「被害」は深刻である。

いわゆるシンギュラリティ論なども、これは生き方、考え方の問題を自然科学的あるいは技術論的に考えようとしていることであきらかに還元論的な視点に立つものであるし、すでに本場の米国ではリーマンショックとともに消え去った「新自由主義」、「小さな政府」の議論がわれわれの周辺ではいぜんとしてはばをきかせている状況である。

しかし、われわれの調査(2016調査)では、こうした還元論や競争原理とは相いれない傾向がはっきりと示されている。

「次のような意見や考えにあなたはどの程度共感できますか。それぞれについてあてはまるものを4つの選択肢の中から一つずつお選びください。／人間は豊かになりすぎると墮落しがちなものだ(SA)」という質問で訊いている「生き方の意味」に75.9%の人が共感を示し(共感できる、ある程度共感できるの合計値)、さらに「次のような意見や考えにあなたはどの程度共感できますか。それぞれについてあてはまるものを4つの選択肢の中から一つずつお選びください。／世の中には科学で説明できないことも数多くある。」という意見への共感度は80.2%(共感できる、ある程度共感できるの合計値)もある。利益の供与だけでは大半の人は動かないということだし、科学だけで人生が説明できるものでもないと思っているのである。このような価値観が実は日本では多数派であり(2016年以外の調査でも繰り返し確認されている)、「利益を供与すれば人は自己保存の本能に駆られて他を押しつけても生き抜こうとしそれで結果として日本が栄えるという論(競争原理)を信じている人は少数なのである。

このようなデータを見る限り、単なる「競争」や「利益の提供(大学で言えば、競争資金を獲得した人間にはそれなりの処遇をするとか)」だけでは人は動かないことはたしかである。逆に「職場の仕事が大変でも、いっしょに苦労している仲間のことを考えると、職場を簡単に去るなどということとはできない」、「時計、玩具、食器など丁寧に作られた製品を手にとると、それを

作った人のまごころのようなものを感じられる]、「自分の子供には生きる上で苦勞させたくないが、同時に苦勞して強い人間になってもらいたいと思う」という意見への共感性が相互に深く連動しているという事実がある以上、働くこと（研究すること、教育することもそう）、ものづくりに共鳴すること、子供や次の世代にも生きる意味の大切さを伝えていきたいと思うことなどが全体として関連する場・「生きる意味の地平」に人々は生きているのである。生きることは「切り売り」できないのである。事実、2016年調査では、「職場の仲間への共感」と「物づくりのまごころ」との間には448、「物づくりのまごころ」と「子供への生きる意味の伝達」との間には573という強い相関関係がある。だからたとえば、「真心を失うこと（人を裏切ること）」は同時にたくさん失うことなのである。

以下、このような問題意識に立ち、われわれの調査データの意味をさらに掘り下げるための考察を紙幅の許すかぎりですすめたいが、以下では主として、現象学や存在論に関わる議論を中心に、情報社会における還元論的、主知主義的な方向性に対抗するための手掛かりになる議論を紹介してみたい。そこで目指すのは、「意味の多様性の回復」という視点からの議論の展開である。

現象学や存在論に注目する理由はいくつかある。それはまず何よりも現象学者の多くが還元論的な姿勢に立って（生活世界論あるいは存在論というかたちで）「意味の回復」を目指してきたという背景があるからで、還元論的な情報社会についての議論は必ずしも多くはないが、しかし、議論そのものには注目されるべき内容を含むものが多い（ドレイファスの議論に代表されるように、あるいはハイデガーの視点に立って還元論的な思想に基づく情報社会論を批判する事例のように）。

さらにもっと本質的な点としては、その学の構造自体が最初から「意味の深み」を探求するものになっているということがあげられる。独自の視点から人間の「受動性」や「時間意識」のありかたを探求した後期フッサールはまさにそうだし、前期のフッサールもその議論の中心には人間の経験に注目する論点がある。ハイデガーになればさらに「意味の深み」の探求は「存在の深み」の探求になっている。

要約すれば、現象学は、次のような特徴をもつ。

(1) それはまずなによりも日常の経験を重視する。(2) 経験が真理（あるいは本物の意味＝本来性）と深く関わりあっているという点を探求する。(3) 経験と真理が繋がっているのに「気づく」のが現象学であり、それがまたわれわれの生きる場である。(4) この「気づき」は共有できる。

日常経験をもとにその経験を少し「突き抜けて」目を転じれば、世界の意味が見えてくるといふことであるが、この意味は科学とか技術とかの知に還元されるものではないのである。「生きること」、「気づくこと」、「真理」がそれぞれつながっているのである。現象学やそれに根差す存在論が情報社会で少なくとも潜在的には大きな意味を持ちうるのはこの点に関わる議論だからである。

2. 日常の中にある真理

現象学の核には、日常の経験を重視する考えがあるわけだが、それは同時に日常の枠を突き抜け「真理」を志向するより深い経験のあり方でもある。

これは筆者なりの現象学に関する要約だが、今回この問題を考えるうえで役にたったのが谷(徹)等の文献である。

谷(徹)やその他の関連する文献をあらためて読んで思ったのが、フッサールの思考の基盤には、経験の重視と経験を越えたアприオリなものがいわば協働して働いているという発想があり、これを様々な形で展開しようとしたのが彼の現象学であるということである。

現象学の系譜に属する哲学は、直観というものを大事にする。直観もカテゴリー直観というものもあり、単純な理解を超えるものではあるが、通常の知覚的な直観にしても「事態」をとらえるカテゴリー的直観にしても経験というものから切り離して捉えることはできない。論理的な認識や理念的な思考において問題を捉えるという前提を置きつつも、構成されるものと構成するものの関係(諸現出と現出者あるいはノエマとノエシスといった関係)、あるいは知覚と知覚の対象の関係(諸現出と現出者の関係)を考える場合、経験的なものが欠かせないというのが現象学である。

諸現出(サイコロの6つの面の見え方はばらばらで一挙には見えない、しかし、最終的にサイコロというものが見えることが想定されている)と現出者(最終的に見えるはずのものが現出者)はそのままではつながらない。つなげているのは、意識である。つなぐものがなければいろいろ見えてはいても、いろいろ経験していても、それはそのまま、経験は経験にとどまる。しかし、それをつなぐことで、経験は「真理」になる。つながった経験の内容は新たな出来事としてそこに立ち現れる。

これは人間にとっての直接的な経験(サイコロの各面はたしかに各人に、あるいは私に直接的に見えているのである)であり、しかもこの直接的経験はそれだけにとどまらず(あるいはそれを媒介として、あるいは「突破」されることで)、本物に行きあたる。

サイコロの場合は少しわかりにくいですが、紙に印刷した長方形の場合(あるいは直方体でもいい)はわかりやすい。これはさまざまな角度から見ると平行四辺形や台形に見えるが(これが諸現出、つまり、さまざまな見え方が経験される)、われわれはその見え方を「突破し」あるいはそれに「媒介」され、「長方形」そのものを見る。(谷 2002:58)(この文献はフッサールの現象学について改めて考えようというきっかけを与えてくれた)。この場合、「長方形」が見えるのは真理が見える(本質が見える)ということである。

これは経験だし、アприオリな真理に関わる見え方の構図でもあるということになる。経験とアприオリな真理の探究がこのように交差するのである。

多様な見え方からそれを「突破」して本物が見えるという仕立て(志向性の重視)はハイデガーにおいてもかわらない。(ハイデガーはもともとフッサールの「弟子」。)ただ、ハイデガーの場合は、端的な知覚にすでに全体性(本来的なもの)がもともと備わっていると考える。経験が真理と交差しているという考えはかわらない。むずかしく言えば、いわば論理や経験に先行するア

プリアリな本来性があり、それは認識を考える場合だけでなく、生きる場面でも「実存のカテゴリ」¹として働き、認識や経験を意味づけているということである。（この部分の記述を進める上では、山本（1994）、山下（2010）が参考になった。）

ハイデガーの場合、もともとの経験そのものが全体的でプリアリなカテゴリ的な意味をもったものであり、それをもっと具体的な場面で経験し見ていくことも真理に関わることである。（この点は、山下（2010）、Gelven（1970）を参照した。）

全体的なものと同別的・事実的なものはその意味で変わらない。

3. 些事は些事にあらず

日常の中にあるプリアリなもの、あるいは日常の当たり前な生活・経験とプリアリなものとの連関を見るのが真理だとしても、この連関はただ知的なものとしてのみとらえられるのではない。そう考えたのがハイデガーである。

この連関をハイデガーは「帰趨連関」として捉える。

ここにはおそらく、還元論的な情報社会がよって立つ主知主義やデカルト的二元論を乗り越えるための重要な手掛かりがある。

世界は通常は、「命題」²でできているものとそう思われている。科学や客観的思考がまずありそれが世界の土台を作っている。ふつうはそう考える（世界の事物や出来事を手前存在と見る）。

しかし、ハイデガーが考えるのは、まずこの世界にわれわれがそもそも生きているという現実・経験があり、その中で事物と人が出会っているのに気づくことが世界について理解するための出発点なのである。

この世界の中で事物や事物をめぐる経験は、人間が生きていくこと・生きにくいことのありかたを中心まわり、事物や出来事は命題以前の「手元存在」としてある。このような事物はばらばらで単独で存在するとか、科学的な分析対象のかたち、すでに分析的な知で「分節」された状態にあるのではなく、全体性の中にある。相互に連関しているし、すでに真理の問いの中に置かれている。これを「帰趨連関」という。

日常の些事に帰趨連関を介して真理が立ち現れているのをわれわれは目撃しているのである。

4. 人生の意味の深さを取り戻すためのケア論

経験の中に真理が混ざり合っている。しかし、それはそのままでは見えにくいのでそれを工夫してよく見えるようにする。それはわれわれ自身がなしとげなければならない。こういう考えは魅力的である。われわれが見た調査データでも、人々は生きる場面で、一般に想像されているのとは違って、自分の利益だけを考え、他者の苦勞に目を背け、孤立して生きることを志向しているわけではない。人はそれぞれ人生の中で真理を見ようとしている。それが実際にできているのは別問題ではあるが。

ケアの問題などもここから見えてくる（筆者の質問にもロボットによる介護の問題を織り込んでいる）。

北米では、ハイデガーの理論に基づくケア論、看護論が盛んであるが¹、そこで中心的な論点となるのは、病や死の見方である。いくつかの見方が医療やケアの場にもあり、一つには患者の病や死を典型的な現象の一例と見る医師や「科学的治療家」の立場がある。もう一方で、患者の立場に立ち、患者自体は自分たちの状況を十分に理解できていないので、その意味を代弁し、代理体験し、それを様々なかたちで患者に伝えるのがケアするものの役割だとする考えもある。看護者も熟練が必要であるが、その熟練度はたんなる医療技術的尺度で測られるのではなく、患者の「気づき」をいかに共有するかがその指標になるのである。(このハイデガー的ケア論、現象学的ケア論は主として以下の文献を参照した。(榊原 2008；池田 2013))

ここで大事なのはケアはただ人の生物学的医学的な身体を介護するという問題だけに関わるものではないということである。

医師は人間の身体を生物学的なものとする。病や死もそうである。

しかし、人間の身体は世界のありようとかかわっている。

患者が病になって死に直面して不安を感じ困惑し途方に暮れるのは、身体を通じて世界の真理と関わることがむずかしくなるからである。世界の真理は物の帰趨連関の中にある。事物は世界において帰趨連関の中に置かれていて、それぞれが相互につながっている。日常が当たり前で面白味もなく過ごせるというのはそこでいろいろなものが既につながっているからである。

このつながりが当たり前でなくなるケースが例えば、病である。

逆の見方をすれば、世界の真の姿はこの帰趨連関、当たり前であることが失われる場面で見えてくるともいえる。病がそうであり、人との別れがそうである。帰趨連関はそこに人がどう事物に関わっているかという点から見る必要もある。個々の事物はそれぞれの使用者に馴染んでいるのであり、その使用者がもはやそれを使えなくなれば、物は物としての即物性だけを示す。しかし同時にその事物の周辺にはその使用者の残影が存在する。

病の中で他者との別れの場面で人はこのような実存的な体験をするが、事物がもともとあった本来のもの（アプリアリなもの）も見えたり見えなくなったりする。

「患者の日常生活への病気の影響は、患者がその経験を日常の平凡な経験に取り込むことが困難であるという形で現れる。・・・病気を経験することで、日常生活、当然として受け入れられていた事柄が問いの対象となる。自己の統合性（自己自身）が第一義的に脅かされ、全体性を根本的に失うという恐れ（存在論的恐れ）は素朴な類型化では簡単に解釈できない。」。(Toombs 2001 : 57-58) (この部分の記述については以下の文献に依拠した。(池田 2013))

看護者、ケアする人間はこのような理解で患者に関わっていく。あるいは患者と関わる中でこのような存在論的な見方に近づいていく。これが現象学的・存在論的ケア論の根底にある考えかたである。

したがって、ロボットの介護により病者ははたしてこの世界との本来のつながりを取り戻すことができるかは未知数なのである。

1 たとえば、Todres et al. (2009)、Toombs (1998) を参照。

5. 生きる場での「死」と「生」の交換・反転

ハイデガー的にいえば、日常の経験の中には世界の本質性（アプリアリ性）というものが現れている。これは日常そのものの中に始原としての全体性、可能性、あるいは、それを妨げるものが隠れているということにもなる。

始原としての全体性、可能性という考えは面白いが、ではそれはどうやってわれわれの調査データが示すような「他者の死（の可能性）」をわれわれが分与し（分与され）、「生」に転ずるという状況につながるのだろうか。命題知、合目的性、主観と客観の分離が始原の全体性・可能性を失わせているというのがハイデガーの考えだが、では、これがどうして、「地域のつながりの深さ」の感覚になるのだろうか。「他者の死（の可能性）」が共有されるのであろうか。そして生の意味の多義性になるのか。

ここでこの問題に簡単に結論を出すことはできないが、議論を進める上での一つの手掛かりとして木村敏とボードリヤールの考えを紹介しておく（木村敏は現象学、存在論の系譜に属する精神医学者だが、ボードリヤールはそうではない。しかし、生と死の連関に関わる興味深い説を提示しているのここで紹介しておく）。

木村敏は、ニーチェやハイデガーを参照して、生成と存在、生命と生成、個人的な生と普遍的な生をわけて考える。「生命の問題が個人的な生命の問題に置き換えられていること」が「生きる意味の深さの喪失」（同時にそのことがわれわれの生きることの実態そのもの）につながるという考えがここから出てくるのだが、この視点からすれば生も死も変わりはないことになる。しかし、木村のその説明だと解釈がむずかしい問題もある。個人的生死の視点に立てば、われわれは他者の死をあくまでも個人的死と見るのであり、自分自身の生とは関係ないということにもなる（木村 2000）。

ボードリヤールは「われわれの社会における死と生の交換を含む象徴交換にかかわる意味の制度の喪失」という視点から「現代社会における孤立した死の現象」という問題を捉える（本稿で紹介した記述はたとえば、邦訳334頁以下）。

ボードリヤールによれば、未開社会では、「死」は「個人的なもの」、「個人的苦悩」の対象ではない。それは社会的に交換され、生と死、財と婚姻の対象と同じように象徴的交換過程のなかにのせられている。ボードリヤールによれば、死が個人的なものとなったのは西洋では16世紀以降である。たぶん、これは宗教改革や資本主義の発達と関連する。未開社会では個人の同一性というものは存在しなかった。人は自分の分身（影、幽霊、映像、イマージュ、物質の霊）と交流することができたのであって、「魂」すらなかった。「魂」は孤立した主体という事態に対応する精神原理なのである（ボードリヤール 1992）。

フッサールやハイデガーとボードリヤールの間では明らかに飛躍があるが、「（存在論的）共同主観」とそれを支える社会的制度の問題に踏み込めば問題のありかは見えてくるようにも思える。そのことを考えた思想家として山口昌夫、柄谷行人、中村雄二郎らの名前が思い浮かぶが紙幅の関係でその点の考察は別の機会に譲る。

6. 生と死の連関性をどう捉えるか

以上、この節ではさまざまな文献を参照しながら、情報社会で生きることをより深い視点で捉えようと努めてきた。上述の議論は、個々の議論のレベルでは、還元論やあるいは狭い意味での合理主義、主知主義を超えようとする姿勢をもつという点で参考になるものである。ただ、以上の議論を検討して思うことは、こうした議論自体がある意味では、生の断面しか切り取っていないのではないかということである。つまりこうした議論は基本的に主知主義や還元論を否定しつつもそれ自体が思想や哲学の枠の中に留まるものであるように思える。

生や死も単独であるのではなく、連関性の中にある。さらに生自体をこえた連関性という問題も考慮に入れる必要がある。あるいは生の意味そのものも捉え直す必要がある。たとえば、観照・再帰性、共感、脆弱性等という点を含めた「複合的図式・人生論」とでもいうべき観点からである。

具体的に言えば、ハイデガーの帰趨連関は参考になるが、しかし、本稿で紹介した調査データに示されているような広い意味の連関を説明するには十分ではないだろう。本稿の調査データが示すものは、人は人生論という枠の中で情報社会の問題に関わっているということである。そこには、全体としての生き方、関心というものがあるが、それは思想、人生観、政治意識、美的倫理意識、ものあわれ、人生の脆弱さやそれと裏腹の生きることへの志向性、といった多様な意味や生き方・志向性の図式と結びついているものであった。ある意味ではそこにあるのはこうした意味や志向性を含む地平といったものであるが、それは、たとえば、ただ人生において遭遇した出来事に驚くとか悲しむとか批判するとかそういったものだけではなく、そのような経験を通じて人生の意味をあらためて問い直すという「再帰的なあるいは観照論的な人生観」とでも呼べる内容に関わるものであった。

それを説明する包括的な理論や図式というものは筆者の知る限り見当たらない。

したがってこうした地平・人生の見方・ありかたは、とりあえず「全体としての人生観」とでも呼んでおくしかないものだが、この人生観ないし地平はけっして固定したものではないという点が肝要であろう。

今回の論文では詳しいデータは紹介しなかったが、2014年に被災地3県（600名対象）で実施した筆者の別の調査では、「全体としての人生観」はただ哲学的、思想的なものだけでなく、政治に対する関心なども含むものであるという点が明らかになっている（この点は本稿でもすでに一部データに基づき論じた）。具体的には、「社会における孤独死への関心」は、「災害や交通事故の犠牲者への共感」、「その共感をベースにした自分の人生の意味への問いかけ（人生に対する観照的視点）」、「人間の死や病など脆弱性に関する関心」などと帰趨連関的に関連する一方、「国内の政治問題への関心」とも関わっている。孤独死が人生の意味に関わる問題であると同時に具体的な政治問題の対象であるという認識もここにはあるのである。このように、ここで論じてきた「全体としての人生への関心」は思想的にあるいは感覚的に個人の内部だけで閉じたものではないのである。

さて以上を踏まえて、本稿の考察において実証的研究と質的分析がどう有機的に関連したかど

うかここで自己点検する必要があるが、実証的研究に関わる部分の知見は評価しうるものだし、質的な分析も問題提起としてはそれなりの意味があったのではないかと筆者自身では思っている。ただ、それを繋げる作業は正直なところ依然として道半ばというところだろうか。

これは成果的にみれば、達成したものは大きいですが、また捉えられていないものも依然多く残ったままだということにもなる。狭い還元論や主知主義では情報社会に生きる人々の実態を捉えられないとわかったのはここでの大きな成果であろう。一方、すでに述べたように、こうした人々の生き方の全体像を説明できる図式はわれわれにとってまだ曖昧なままである。生や死の意味を深く掘り下げることは重要な問題だが、一方きわめて難しい問題でもあるのだ。とりあえず現時点ではそう言うしておくしかないようだ。

IV. まとめに代えて

日本に生きるほとんどの人はたぶんフッサールの名前もハイデガーの名前も知らない人が大半であろう。しかし、にもかかわらず、調査データに見るように、「生と死の循環」とでも呼べるような意味への志向性も含めて、多くの人が潜在的には、日常の中で「深い意味」の志向性にかかわるような姿勢を示しているのはなぜなのか。

一方、きわめて日本的であると通常思われている「針供養」やそこから派生する「ロボット供養」の問題や、「もののあわれ」的ものの見方に関心を示す人が日本以外にも存在するという事実もある(これも筆者のアジアやヨーロッパにおける調査によって明らかになったことである)。

スウェーデン(筆者は、スウェーデンの研究者と日本・スウェーデン2か国比較研究に参加している)でも東アジアや東南アジアでも、「生きる意味の深さへの志向性」的なものがあり、それが情報社会における諸問題(プライバシーやロボット倫理など)と連関するという傾向は詳しい分析などはまだ十分ではないがすでに一部確認されているのである。「死することに思いをはせ、そこからふりかえって生について考える」というのは、生きている人間にとって、その人がどこで生きているかにかかわりなく普遍的な問題なのであろうとも思う。そういった点も含め、考察すべき問題はあまた残るが、それはまた次の機会に譲りたい。

なお、以下、本稿で紹介した調査について若干の補足をする。筆者は、過去15年ほど、「情報社会の比較文化論的研究」、「情報倫理の比較文化論的研究」に関する量的質的研究を主として欧米の研究者(Capurroら)と共同で続けてきたが、この研究を通じて以下のような興味深い知見を得ることができた。～「伝統的な日本的価値観・人生観」の(再)発見。この価値観・人生観は「物質文明・現代文明批判主義」(的世界観)といったものと「間人主義・共生的人間関係指向」と呼ぶうるものの組み合わせでできている。具体的には、前者は、「運命観の見方」、「物欲否定」、「現代文明批判」、「利己主義批判」といった一連の価値観によって構成される。後者は、「家族や友人などの親密な人間関係」を生きがいとして指向し、「誠実であること」を重要視する「互助的・間人主義的な人間観」である。～このような研究・調査の基盤になったのは、筆者が

1981年以来日本で実施してきた「災害観調査」である。この調査では、客観的で合理的な因果関係の図式（中村雄二郎がいう「主語の論理」）では説明できない「災害は天譴論である（災害が発生するのは天の人間に対する警告である）」という考えや「人間には運命がある」などという考えが日本に住む人々の意識の中に根強く存在することが明らかにされた。さらにその後の筆者の調査で、「このような伝統的価値意識あるいは「存在論的意識・図式」とさまざまな社会問題、情報環境における諸問題への意識・関心との間に「連関」が見られること」も明らかになった。本稿で紹介した知見はこうした過去の知見や問題意識をもとに整理された質問票を用いた調査に基づく。なお、上記の調査についてはたとえば、Nakada (2019)、Capurro and Nakada (2011) を参照されたい。

参考文献

- 池田喬 2013 「死に至る存在としての人間 ハイデガーとケア」『明治大学教養論集』通巻493号, 145-167頁。
- 榊原哲也 2008 「看護ケア理論における現象学的アプローチ—その概観と批判的コメント—」『フッサール研究』6号, 97-109頁。
- 木村敏 2000 『偶然性の精神病理』岩波書店。
- 谷徹 2002 『これが現象学だ』講談社。
- トゥームス 2001 『病いの意味—看護と患者理解のための現象学—』永見勇訳, 日本看護協会出版会。原著: Toombs, S. K. (1993). *The Meaning of Illness*. Dordrecht, Kluwer.
- フッサール 1939 『純粹現象学及現象学的哲学考案』池上鎌三訳 (上), 岩波書店。
- 1941 『純粹現象学及現象学的哲学考案』池上鎌三訳 (下), 岩波書店。
- 2015 『論理学研究 1』立松弘孝訳, みすず書房。(みすず書房刊行の『論理学研究 2』, 『論理学研究 3』, 『論理学研究 4』も参照した。)
- ボードリヤール 1992 『象徴交換と死』今村仁司訳, 筑摩書房。原著: Baudrillard, Jean 1976 *L'échange symbolique et la mort*. Paris, Gallimard.
- 山下哲朗 2010 「カテゴリー的直観とアプリアリな全体性—ハイデガーによるカテゴリー的直観の領得をめぐって—」『フッサール研究』第8号(特集「経験とは何か? 現象学的経験概念の批判的再検討」), 50-60頁。(https://husserl.exblog.jp/13204753/) 2020年1月1日アクセス。
- 山本興志隆 1994 「世界と死について—ハイデガーの思惟を手掛かりにして—」『哲学論叢(京都大学)』21号, 85-96頁。
- Capurro, R. and Nakada, M. 2011 "A Dialogue on Intercultural Angeletics", Rafael Capurro and John Holgate(eds), *Messages and Messengers*. Munich, Fink Verlag, pp.67-84.
- Capurro, R., Eldred, M. and Nagel, R. 2013 *Digital Whoness: Identity, Privacy and Freedom in the Cyberworld*. New Jersey, Transaction Books.
- Dreyfus, Hubert 1972 *What Computers Can't Do: A Critique of Artificial Reason*. New York, Harper and Row.
- Gelven, Michael 1970 *A Commentary on Heidegger's "Being and Time"*. New York, Harper and Row.

Heidegger, Martin 2001 (original version in 1927) *Sein und Zeit*. Tübingen, Max Niemeyer Verlag.

Nakada, Makoto 2019 “Robots Seen from the Perspectives of Japanese Culture, Philosophy, Ethics and *Aida* (betweenness)”, Thomas Taro Lennerfors and Murata Kiyoshi(eds.), *Testugaku Companion to Japanese Ethics and Technology*. Cham, Springer, pp.161-180.

Todres, L., Kathleen, T. Galvin, K.T., and Holloway, I. 2009 “The Humanization of Healthcare: A Value Framework for Qualitative Research”, *International Journal of Qualitative Studies on Health and Well-being*. 4(2), pp.68-77.

Toombs, S.K. 1988 “Illness and the Paradigm of Lived Body”, *Theoretical Medicine*. 9, pp.201-226.